小さな浮島家族
―パラグアイ

7

パラグアイを流れるパラナ川は南米にたくさんある大河の一つ。植物相が豊富で支流が入り組んでいる。ティグレという広大な浮島の密集するエリアがあって、そこに住む人々はヌートリアを主食にしていると聞いた。ヌートリアといったらカワウソではないか。この国ではどうなっているのか詳しくはわからなかったが、確かカワウソは国際的にもレッドデータブックに入るような保護種ではなかったか。

三日間の余裕をもってパラナ川河畔を半日

ほど遡上し、途中から船に乗った。そのあたりを荷物運びで航行している船なので地理には詳しい。浮島に住む人々のところへ連れて行ってほしいと頼むと、すぐにわかったようであった。しかし車を降りたところからまだ三時間ほども川をさかのぼる。巨大な川のいたるところにこんもりした小山のある島々が見えてきた。案内人に聞くと、島と思ったそれらも実は浮島なのだというので驚いた。浮島というとチチカカ湖あたりにあるパピルスのようなものが集まってできている頼りのないものではないかと勝手に思い込んでいたのだ。そこらの浮島は島と区別がつかない巨大なものから、フットボール場ぐらいの平面の規模のものまで多種多様だった。どれもじっと止まったままなので、そこから見えるすべての島のようなものが全部浮いているとは、一瞬言われただけでは到底信じられない。まったく世界にはいろんな風景があるのだなあと感心していると、目的の浮島の上に暮らす家族の家に着いた。

小さな桟橋が作られていて、われわれの乗ってきたような小舟から楽に乗り降りできるようになっている。六十代くらいの老夫婦ともっと年配のおばあさん、それに青年兄弟が二人。犬が三匹、ニワトリが十数羽いた。どれも放し飼いだから犬やニワトリが警戒して大声で鳴き叫び、われわれ闖入者を、まあつまりはにぎやかに歓待してくれた。

いろいろな説明を聞き、確かに彼らがヌートリアを捕獲してそれを主食にしているのだという話をじかに聞けた。宿泊する余裕はないので、さっそくその狩猟を見せてもらうことにした。

きびしいけれど幸せな国

9行

きたい国はいくつかあって、その中の一つに中央アジアのキルギスタンがある。ソ連邦時代はなかなか行きにくかったが、冷戦が明けて韓国側からわりあい素早く入国できるようになった。キルギスはユーラシア大陸でいちばん美しい風景だといわれている。草原があり森林があり美しい湖が広がっている。そこに住んでいる人々はモンゴルやブリアートと北からの中央アジア人が入り交ざったような顔をしており、写真を撮るのも大事な仕事にしているぼくはそこでポートレイトを撮るのが夢だった。ところが出発しようか

の過疎ぶりだった。けれど周りを取り囲む千メートルほどの山々のずっと先には、もう四月だというのに真っ白に雪を輝かせる北アルプスを望むことができる。

小さな川のそばに主要な道路が走り、そこから周囲を見渡すとぽつんぽつんと家々が見える。遠くから見ただけでは住人がいるのか、もう空き家となっているのかの判断がつかない。

事前に調べていったデータでは、大正時代には千数百人の住人がいたというが、今は百二十人ほどになっているという。

主な産業は農業なので、老人ばかりが残っているのだろうと思ったら、ここ数年の間にいわゆるIターン現象がこの寒村にも起こり、全国各地から若い夫婦が戻ってきて、使われなくなった家を改築したり、新しい居住エリアを増築したりして住み、編集者とかデザイナーとか、何かのビジネスのプランナーなど、いかにも都会的な職業が営まれている。パソコンなどによって居住地や仕事場所を選ばなくても、若い人たちが住めるようになったのは、限界集落にとって明るい兆しだ。